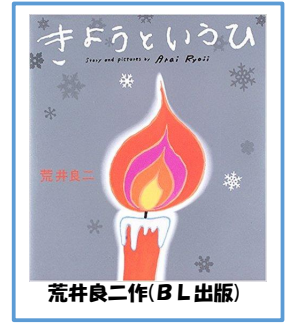


沙羅の樹文庫だより



今年もあとわずか、今日という日に、
あなたは何をやるのでしょうか。

ある日、
私は雪の結晶を見ていた。
十一階のマンションの小窓に
精巧な小さな六角形を見つけたのだ。
雪の結晶は窓に点なし、
張り付いていた。
あれはどんな冬のひと日だったか。
みつけたのは朝だったか昼だったか、
雨から雪に変わった日だったか、
朝から雪の日だったか、
風はどうだったか、
覚えていない。
それでも私は奇跡でも見るように
窓のその美しい形状に見入っていた。
透明なその日の
どこだけが残り
今でも私をにこやかにする。
その力で
結晶が私に張り付いている。
木坂涼「ある日」(文庫の詩の欄から)

★開館日は通常は
第3日曜と前日の土曜です★

今月17日午前にはクリスマスお楽しみ会
今年さいごの文庫の日、歌って、遊んで、
文庫のクリスマス年越しをしましょう。

2018

- ◆ 1月は通常 20日(土)、21日(日)の両日
- ◆ 2月は通常 17日(土)、18日(日)の両日
- ◆ 3月は通常 17日(土)、18日(日)の両日
- ◆ 4月は通常 14日(土)、15日(日)の両日
- ◆ 5月は変則 18日(土)～21日(月)の4日間

GW最後の6日に

<藤田浩子さんの子どものためのおはなし色々
スペシャル>イベントがあります

詳細は追ってお知らせ。

文庫の時間 土曜日は 14:00～17:00
日曜日は 10:00～15:00

★毎月開館日の日曜には、10:30～11:30

子どものための小さなおはなし会があります。

★おはなし沙羅の勉強会

毎月開館土曜日 11:00～13:00

よみきかせの練習・本選の勉強にもどうぞ!

声なんです。美声でなくて、印象的な声、これがどうも朗読には欠かせないようです(すみません、今見たら先月も同じようなことを書いていました)。でもドラマ自体も個性ある若手女優たちがなかなか良くて!主人公を島に運ぶ船頭や漁師たちも本当に中也の詩を語っているのかしら?地元愛に溢れたドラマでした。◆政治や社会に疎くても昨今の世情は不安いっぱいです。あと2週間に迫った新年、希望のある年がありますよう。◆いただいた多数の本、少しずつ登録しています。古いけど、読み忘れていた本、懐かしい本があります。◆今年読まれた本でおすすめて教えてください。◆お元気でよい年越しを!来年も文庫続けられますよう。今朝、海は金の粉をまぶしたように光っています。(西村)

沙羅の樹文庫 0557 -51-3737
<http://www.saranokibunko.com>

文庫あれこれ◆昨 14日2時過ぎ、スタッフ○さんの車で着いたとき、大鳥がくっきりと浮かんでいました。遠くの景色も見晴らかせます。冬の大室はまた格別ですね。◆そして昨日は赤穂浪士討ち入りの日。数年前、知人の法事で行った泉岳寺で、中学時代の級友が住職の奥さんでした(社長の奥さんが大変なのは身内にいるので知っていますが、お寺さんも大変なようです)。そのとき、四十七士のお墓をお参りしたのですが、ごく質素なものだったと記憶しています。今の世に忠も義もあつたものではないですが、でも確かに討ち入って、切腹した人たちはいたのですよね。◆11月の下旬、福岡で13日目のお相撲を見てきました(九州場所)。番狂わせもあり、ドキッとする取組もあって、つかの間(飛行機が遅れてしたが、南国と違って広さもそこそこアットホームな感じで後方椅子席でも楽しめたのですが、そのあとがいかげん。日馬富士の引退からこっち、何とも後味の悪いこと。◆子どものころ、相撲部屋でちゃんこをいただいたり、今は亡きお相撲さんたちにも可愛がってもらったので、少々現状は悲しいです(下の写真は福岡国際センター)。



◆み ダメ数学教師が妻子に逃げられ、授業も面白くできず朗読教室に通う羽目に。そこで好きな数学だけではない素晴らしい世界を知ることになるのですが、一昨日 video 撮りしておいた山口放送?発のこれまた「朗読屋」(吉岡秀隆)を観て、よかったです。こちらは、やはり冴えない男がお金持の末亡人に中原中也の詩を読むという設定なのですが、両方とも、

17年12月に読んだ本の感想

12.14日 by 森林浴

『ふたりからひとりーときをためる暮らし それから』

つばた英子、つばたしゅういち 著

自然食通信社刊 2017年9月 第10刷

この本は私が10月15日の朝日新聞の読書欄の「売れる本」(最相葉月さんが書いた書評)のところで見て購入希望を出したものです。80歳を過ぎてからの老夫婦の自然と共存する菜園生活の記録とでもいべきもので、「台所を大事にする、畑を耕す、友人に自家製ジャムやベーコンを送る、食器は高くても長持ちするものを買う」、などの生活哲学を守って良質な生活を楽しむことがこの夫婦の基本です。お二人を描いたドキュメンタリー映画は若者にも好評らしい。何よりも沢山ある写真が、綺麗によく撮られていて、見ていて楽しいし、二人の生活の神髄がよく伝わってくる。本を出したのが自然食通信社というのも面白い。たまたま今日の新聞を見ていたら、この夫婦はすでにミネルバ書房からも2冊の本『高蔵寺ニュータウン夫婦物語』と『キラリと、おしゃれーキッチンガーデンのある暮らし』を出されておられ、なかなかの人気カプブルだったんですね。

ご主人のつばたしゅういち氏は2015年6月90歳で、自宅で眠っているうちに静かに亡くなったという。だからこの本の大部分は奥さんのつばた英子さんの書いた文章です。

『人生の役に立つ聖書の名言』

佐藤優 著 講談社刊 2017年9月 第1刷

新聞・雑誌などの本の記事や広告などで、この「佐藤優」という名前を見ない日が無いくらいよく本や本や論文などを書きまくる人である。同志社大学で

キリスト教を専攻して外務省に入省した変わり種だが、鈴木宗男事件に巻き込まれて512日間牢屋に閉じ込められた人物でもある。キリスト教について私は全くの素人ですが、この本は読み易いように大きな文字を使ってキリストの教えをうまくまとめている。しかし、読んでみると、そもそもキリスト自身が書き記した文書があるわけではなく、すべて彼の弟子=使徒=ペテロ・ヨハネ・マタイ・ヤコブ・ユダ・などが残したものと、使徒ではなかったが、突然光に打たれて、幻の中でイエスの声を聞いてキリスト教徒になったというパウロの記録の集成なのであり、キリスト教という宗教を確立したのは生前イエスと会ったこともないパウロだということ。パウロの存在の圧倒的な重要性に注目する必要があることが分かる。

『ゲバラ漂流 polar star』

海堂尊 著 文藝春秋社刊 2017年10月 第1刷

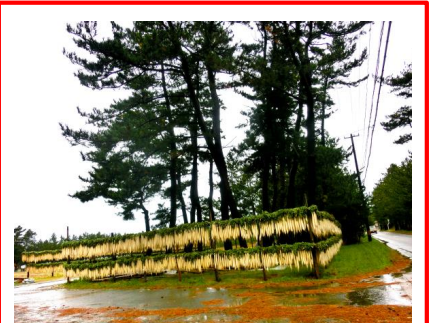
海堂 尊と言う人の本は初めて読んだ。なにしろ私は昔南米に少しいたことがあり、キューバの音楽も結構好きなので、アルゼンチン出身でキューバ革命の立役者、絶大な人気を持った伝説的英雄「ゲバラ」の話になるとつい興味を覚えてしまうので、この本を手にとった。Polar Starとは北極星のことだが、「人々の指針になる人」の意味がある。

この本は著者が南米の革命児ゲバラに成り代わって、南米・中米の革命を追及してゆく「小説」であり、プエノス大学同級生の女性ペルタに書いた手紙の連載という作りごとである。

祖国のアルゼンチンから、医師免許を持つものは軍医になれという義務を課した独裁大統領ペロンを嫌って逃げ出し、まず隣国のボリビアへ入ってその革命の光と影を味わったあと、ペルー、パ

ナマ、コスタリカ、ニカラグア、そしてグアテマラと革命を追及しながら移動してゆく。南米諸国は問題だらけ、革命が、そして米国のというスーパーパワーの干渉が絡んで、絶望的な混乱が展開する。ゲバラが英雄になったのは、この後のキューバ革命だが、この小説はその前のゲバラの動向である。どこまでが事実でどこからが小説なのか、私には分からない。巻末の12ページある膨大な参考文献には溜息が出た。

★★★★★



国道沿いに大根が干してある・冬の風物詩(山形)

◆今年も、森林浴さんには、たくさん本を紹介していただきました。また、新たに北海道から友人の亜子さんが、手取りにくい本の書評を寄せてくれます。ほかに、文庫には隠れ筆達者がたくさんおられます。次の年も、興味深い指摘とともに、寄稿のほど、よろしく願いいたします。

◆また、皆さんから、たくさん本をいただきました。心ならずも文庫に置けない場合もあります。ご容赦ください。(さ・ら)

17年12月に入った子どもの本

絵本

『きょうというひ』(荒井良二作 BL 出版) ID12594
『やもじろうとはりきち』(降矢なな文・絵 佼成出版社 2017) ID12591
『すばこ』(キム・ファン文 イ・スンフォン絵 ほんぶ出版 2016) ID12588
『手をつなぐ』(鈴木まもる作 金の星社 2017) ID12582
『文様えほん』(谷山彩子作 あすなろ書房 2017) ID12590
『12 星座とギリシャ神話の絵本』(沼澤茂美・脇屋奈々代作 中島梨絵絵 あすなろ書房 2016) ID12589

<クリスマス絵本>

『きょうりゅうたちのクリスマス』(ジェイン・ヨレン文 マーク・ティグ絵 なかがわちひろ訳 小峰書店) ID12586
『ラスムス クルンブークリスマスのぼうけん』(カーラとヴィルヘルム・ハンセン夫妻原案 ペア・サナーヘー工作 ヤン・ソールハイム絵 山口明雄訳 小学館 2015) ID12587
『クリスマスイヴの木』(デア・ハティ文 エミリー・サットン絵 三原泉訳 BL 出版 2015) ID12592
『ホワイトクリスマス』(ウォルター・デ・ラ・メア詩 カロリーナ・ラバイ絵 海後礼子訳 岩崎書店 2015) ID12593

よみもの ほか

『さよなら、田中さん』(鈴木りか著 小学館 2017) ID12583※作者は中2少女なので、一応児童書に。

『からすが池の魔女』(E. G. スピア作 掛川恭子訳 岩波書店) ID12537※読んでほしい古典
『グリムのむかしばなしII』(ワンダ・ガアグ編・絵 松岡享子訳 のら書店 2017) ID12492※古くて新しいグリム。1巻は在庫。

『今すぐ読みたい! 10代のための YA ブックガイド 150! 2』(ひこ・田中、金原瑞人編 ポプラ社 2017) ID12584
『庭園の中の三人 左と右』(マーシャ・ブラウン著 松岡享子/高鷲志子訳 東京子ども図書館) ID12585

17年12月に入ったおとなの本

フィクション

『ゴースト』(中島京子著 朝日新聞出版 2017) ID17312
『カシス川』(狹野アンナ著 文藝春秋 2017) ID17275
『アナログ』(ビートたけし著 新潮社 2017) ID17274
『花びら供養』(石牟礼道子著 平凡社 2017) ID17311
『本物の読書家』(乗代雄介著 講談社 2017) ID17294
『にじいろのカーテン』(小川糸著 集英社 2017) ID17293※request
『双子は驢馬に跨って』(金子薫著 河出書房新社 2017) ID17295
『我が名は、カモン』(犬童一心著 河出書房新社 2016) ID17292
『西郷どん 並製版 上中下セット』(林真理子著 KADOKAWA 2017) ID17271~273

『戦の国』(沖方丁著 講談社 2017) ID17266
『湖畔荘 上・下』(ケイト・モートン著 東京創元社 2017) ID17269~270※request
『冬の物語』(イサク・ティネセン著 横山貞子訳 新潮社 2015) ID17290
『アイルランド冬物語—晩秋、クリスマス そして冬の暮らし』(アリス・テイラー著 高橋豊子訳 新宿書房) ID17310

エッセイ・評論・詩 ほか

『対岸のヴェネツィア』(内田洋子著 集英社 2017) ID17298
『枯れてたまるか!』(嵐山光三郎著 新潮社 2017) ID17268
『遅れ時計の詩人 編集工房ノア著者追悼記』(滝沢純平著 編集工房ノア 2017) ID17299
『人生の気品』(草笛光子ほか多数著 新日本出版社 2017) ID17300
『ことばの果実』(長田弘著 潮出版社 2015) ID17296
『まちの本屋』(田口幹人著 ポプラ社 2017) ID17302
『街場の天皇論』(内田樹著 東洋経済) ID17267
『森のノート』(酒井駒子著 筑摩書房 2017) ID17297※request
『運慶のまなざし』(金子啓明著 岩波書店 2017) ID17301
『北斎娘・応為栄女集』(久保田洋一著 藝華書院 2017) ID17291

文庫

『大聖堂 上・中・下』(ケン・フォレット著 SB クリエイティブ) ID17307~309※request

新書

『日本史の内幕』(磯田道史著 中公新書 2017) ID17313
『日本の歴史を旅する』(五味文彦著 岩波新書 2017) ID17277
『西郷隆盛維新 150 年目の真実』(家近良樹著 NHK 出版新書 2017) ID17306
『ロシア革命 100年の謎』(亀山郁夫著 河出書房新社 2017) ID172778
『生と死のことば』(川合康三著 岩波新書 2017) ID17276
『バカ論』(ビートたけし著 新潮新書 2017) ID17303
『すごい古書店 変な図書館』(井上理津子著 祥伝社新書 2017) ID17304

寄贈

ありがとうございます。

『シェイクスピアより愛をこめて』(小田島雄志著 晶文社) ID9735 『人間とマンボウ』(北杜夫著 中央公論社) ID9736
『あひるの子—アンデルセン幻想』(水上勉著 集英社) ID9737 『わが魂はネルソンとともに』(ウィニー・マンテラ著 アン・ベンジャミン編 新日本出版社) ID9738 『友だちは無駄である』(佐野洋子著 筑摩書房) ID9739
『人形曼荼羅—自伝随想』(辻村ジュサロー著 求龍堂) ID9740 『幻の女』(五木寛之著 文藝春秋) ID9741 『私の浅草』(沢村貞子著 暮しの手帖社) ID9742 『TN 君の伝記』(なだいなだ著 福音館書店) ID9743 『役者 MEMO 1955—1980』(仲代達矢著 講談社) ID9744 『通りすぎて』(和田光生著 和田光生) ID9745 『巴里の下オムレツのにおいは流れる』(石井好子著 暮しの手帖社) ID9748

『古典落語と落語家たち』(興津要著 表玄社) ID9750 『依頼人は死んだ』(若竹七海著 文芸春秋) ID17280 『西巷説百物語』(京極夏彦著 角川書店) ID17279 『源氏物語私見』(円地文子著 新潮社) ID17289 『うたかた サンクチュアリ』(吉本ばなな著 福武書店) ID1728 『華やぐとき』(芝木好子著 読売新聞社) ID17287 『落葉の季節』(芝木好子著 読売新聞社) ID17286
『花より花らしく』(三岸節子著 求龍堂) ID17285
『フンとフン』(井上ひさし著 朝日ソノラマ) ID17281

『愛と光への旅—ヘレン・ケラーとアン・サリヴァン』(ジョセフ・P・ラッシュ著 中村妙子訳 新潮社) ID17284 『サン=テグジュベリ—愛と死』(ジュール・ロフ著 山崎庸一郎訳 晶文社) ID17283 『クララ・シューマン—真実なる女性』(原田光子著 ダヴィッド社) ID9746
『ゆきてかへらぬ—中原中也との愛』(長谷川泰子述 村上護編 講談社) ID17282

カズオ・イシグロのノーベル賞受賞を聞いて

Yukiko M.

以前、「沙羅の樹文庫」の開設 10 周年を記念する文集に、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』を紹介した時「いつかノーベル賞をとってほしい!」と書いたけれど、それがこんなに早く実現するとは、夢にも思っていなかったので嬉しい驚きです。

わたしは彼の受賞を予想したわけではなく、単純に自分の好きな小説の作者が文学賞を取ったら、という希望を書いただけでした。それなのに、本好きの友人から「スゴイ、スゴイ」と言われるのは、わたしにとっては、何だか軽筆から駒、あるいは棚からぼた餅といった感もありま

す(イシグロ先生ごめんなさい)。

それに確かに彼の作品をほとんど読んでいたものの、そのすべてに感銘を受けたわけではありません。最近作『忘れられた巨人』にいたっては最後まで読み切ることができなかったもので、彼について語る資格などないような気がします。でも、やはり気になる作家ではあるので今後も彼が生み出すものは読みつけていこうと思っています。

ノーベル賞については今までそれ程関心があったわけではないのですが、昨年のボブ・ディランについて、今回のカズオ・イシグロとぐっと身近になったような気がします。近い未来には、やはりわたしの好きなポール・オースター、などと思わないでもありませんが、今回は、公平を期して英語圏ではない国の、多分私が全く知らない作家になるような気がします。

今までもノーベル賞をきっかけに初めて読んだ作家も少なくありません。南アフリカの J. M. クッツェー、あるいは、ウクライナのスヴェトラナ・アレクシェーヴィチのような作家たちに出会えたのは、わたしにとっては大きな収穫でした。かれらがノーベル賞をとらなければ多分知ることもなかった作家たちでしょう。

そういった意味では、普段翻訳されることの少ない国の作家に世界の注目を集めるノーベル賞の役割に期待します。

推理小説が大好きで、目下北欧ミステリにはまっている私の普段の読書傾向といえ、賞に関係なく「おもしろそう」といった基準で選んでいます。たまには襟を正して(!) 年に一度のノーベル文学賞作品に対峙するのもよいか、と思っています。